

イー・フー・トゥアンの「場所」理論について

松田 純子*

A Development of Place Theory By Yi-Fu Tuan

Junko Matsuda

要 旨 「空間」と「場所」については、様々な環境論が展開されている。しかし、近似したこの二つの概念に対しては、人間の存在と「場所」を統一体としてとらえることは少ないように思う。本稿では、人間と「場所」とのつながりを研究している、イー・フー・トゥアン（1930～）の「空間」に対する、人間の知覚経験の重要性と、それによって獲得する、「空間」と「場所」の諸価値について取り上げ、その機能と意味について考察する。

トゥアンの人間の身体レベルからとらえる「空間」と「場所」理論においては、「空間」のなかに、自分を基礎づけようとするために用いる様々な「場所」は、個人的経験によってのみ存在する安全で自由なものである。一方で、急速に変化していく社会が、人間中心の「場所」を変化させてしまい、長い年月の安定した環境は望めなくなってしまうことを、我々は考えなくてはならない。そこには、人間の現存在の持続性と、変異変遷する「空間」の問題が反映しており、人間にとって親密な「場所」の形成過程を探る上で、重要な意味をもつ問題である。

I 「空間」の意味

「空間」ないしは「場所」といった言葉は、それほど厳密な定義や考察をとまわず、ごくあたりまえの概念として用いている。たとえばスペースデザインに取り組む場合には、我々は「空間」と「場所」とに適応するために、より効果的な形態と色彩を創造しようと試みる。あるいは、建築や都市政策においては、アメニティ（快適さ）を重視した構造が考案されており、ポストモダンの今日においては、機能よりも意味、量よりも質へといった、人間を主体として考えるデザインの要求の高まりに接する機会が多くある。

また、繊維素材を扱ったテキスタイルアートの分野においても、公共空間など、その作品が設置される「空間」のアクセントとなったり、建築自体の機能と目的を象徴するような、力強さを内包した作品が好まれる。一方で、建物を構成しているエレメントの一部として、建物全体の機能や、その建物が一般の人々に与える「空間」的なイメージと調和した作品が好まれる傾向がある。人間にとって、心地良い環境は、利便性や機能や美的価値にとどまらずに、環境と人間との相互のつながりを、明確にする必要があるといえるだろう。制作の面からみても、デザインすべき「空間」がどのようなものかを理解するために、我々がまず一般的に思考することは、「空間」の広がり、密集の度合いといったことである。

しかし、人がどのように「空間」と「場所」

* 本学助教授 テキスタイルデザイン

を感じ、考え、行動しているのかといった、人間を主体にした考察は案外少ないように思う。「空間」と「場所」を独自の理論で展開した研究に、イーファー・トゥアン著『空間の経験』(山本浩訳 ちくま学芸文庫 1993年)がある。原著は、Yi-Fu Tuan, *Space and Place: Perspective of Experience* (Minneapolis University of Minnesota, 1977)。イーファー・トゥアン(後述)によれば、冒頭でこの二つを次のように断言している。「場所すなわち安全性であり、空間すなわち自由性である」(邦訳の11頁)〈原書のP3〉。以下本書の引用は、()とくゝとで表記する。つまり、ふつうには近似した意味合いながら、その概念はかなり、異なるものとして把握している。

最近の環境デザイン研究会は、環境と密着した「身体」レベルの知覚体験と、風土といった次元から「空間」と「場所」をとらえるトゥアンの独創的な「場所」理論を取り上げて、建築と都市の環境整美の基礎的な考え方として重要視している(『環境デザイン』10頁~84頁 学芸出版社 1998年)。

トゥアンの理論は、人間の知覚体験を主体として扱う「空間」と「場所」の考察である。本稿は、イーファー・トゥアン著『空間の経験』を「身体レベル」ならぬ自分の「創作レベル」から、その問題点と意味について考察するものである。

II イーファー・トゥアンの「場所」理論とは

はじめに、イーファー・トゥアンについて、本書の訳者あとがきと、邦訳された彼の著作(現在まで7冊の訳書がある)から、記すことにする。彼は、1930年12月、中国天津生まれの中国系アメリカ人の地理学者である。1960年以降は、人間と空間・場所の関係について、人文地理学の視点からとらえ、人間と環境との関係を人間の感覚や感受性の面で把握した著作を出版している。哲学や心理学に発生した現象学が、

地理学に大きな影響を与えた現象学的地理学(humanistic geography 人間主義地理学)の先駆者であるという。彼は「*topophilia*」という彼自身による造語による概念を好んで用い、人間を主体として扱う環境論を明示した。この造語は、地理学だけでなく、人類学や民族学、文学、建築学、デザイン、心理学、環境論など様々な分野に関する空間認識のありかたに影響を与えて注目されている。1970年初頭にアメリカでは、人間にとって環境がどのような意味や価値をもつのかを考えようとする研究が始まり、彼はその中心的活動家であるといわれている。

さて、400頁に及ぶ『空間の経験』の「空間」と「場所」に関する理論は、きわめて複雑である。イーファー・トゥアンは、独自の概念を示すために、図解を好んで用いる。以下本稿もそれにならい、「空間」と「場所」に関する彼の言わんとする要点を、概念図に書き改め、次の4つにまとめる。

1. 「経験」理論の構造

ここで彼がのべている経験とは、感覚、とくに視覚、感情、思考を意味しており、これらの人間の感覚が複合し、積み重ねることで、我々の生活している空間が秩序化されるとしている。イーファー・トゥアンが考える空間は、身体が密着する経験の次元から把握するもので、経験そのものを最も重要視しているのである。

そもそも感覚とは、人が何らかの現実を知り、その現実何らかの構造をあたえる際の様々の様式であり、臭覚、味覚、触覚といった直接的で受動的な感覚から、視覚による能動的な知覚や象徴化という間接的なものに至るまで幅広い。なかでも、視覚経験による空間の広がりや密集の度合いの認識や、距離感や方向感覚の獲得、そして、元来視覚に備わっている立体知覚能力による三次元の空間の理解に、さらに、触覚経験が加わることによって、空間と空間のなかの種々の物体からなる周囲の世界を知ることができる。

我々は、空間というものを対象物や場所の相対的位置として認識したり、場所と場所とを隔

てたり、結びつけたりする間隔や広がりとして、あるいは、いくつもの場所がつくる地域として認識しているのである。

このために、最も中心的な機能である視覚経験をトゥアンはあえて重要視するのであるが、経験している状況そのこと自体が空間を創造していることになるという現象学的な見方を強調している。彼にとって安全な場所や、自由な空間と言うものは、身体が経験している状況の空間領域だけを示し、この領域を一つの単位として考えている。つまり、現在いる地点の身体を座標軸として、前後、左右、上下の方向が確認され、空間と場所が認識されるのであるが(図1)、この一つの単位の移動によって過去の空間の1コマと未来の空間の1コマが形成され、その中間点に、一瞬の現在空間が現れるという考え方である。この、人間が空間を経験している状態は、まったく個人的な経験のもとに生ずる「場所」であり、この考え方はトゥアンの「*topophilia* (場所愛)」の概念の論拠となっている。

2. 自己中心的な空間認識論 = 「場所愛」の構造

この「場所愛」の意味は、個人的な視覚経験によって獲得した空間の1コマの連続だけに対してあらわれるトゥアンの独自の空間認識論であり、我々が考える環境全体と個人空間との相互のつながりをもった広域性を示すものではない。個人空間の1コマの連続だけを「場所」と考え、そこにとどまって愛着や偏愛をすることを意味する。

ここでも彼は人間の経験を重視する。一般論で考えるならば、我々がある物体や場所を知覚の働きを通して経験したり、すべての感覚を通して経験する時、その物体や場所は、具体的な現実を獲得する。そして、場所と物体が空間を限定し、場所は我々が生存している価値が集中する中心となる。その経過として、場所は人が生まれ、成長していく過程にわたる長年の感性の成長の結果として、深く意味をもつものとなる。

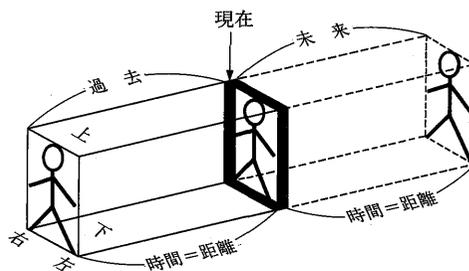


図1 「経験」理論の構造

こうした個人空間と場所は、社会や周囲の環境と共に変化し、成長して広がっていくのに対して、トゥアンはあくまでも個人的成長過程のみに執着し、周囲の社会や環境という循環の枠組みに属することを嫌うのである。人間は空間に「場所」を無限に作り出すことで、空間と環境を秩序づけていることを認める一方で、彼にとっては「場所」は、空間から切り取られ、囲い込まれたところであり、人間という主体がその個人的な生活の意味や価値を賦与しているところとして、特定の位置を占めている独立した空間の1コマの連続がいくつも散在しているものなのである。

すなわち、環境全体を構成する場所とは区別され、それぞれの空間の1コマの連続の枠組みが、自由に浮遊する世界なのである(図2)。たとえば、生まれたての赤ん坊にとっては、母

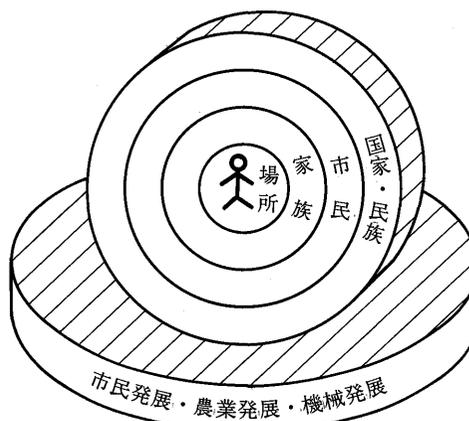


図2 自己中心的な空間認識論 = 「自己愛」の構造

親の腕の中が初めての場所であり、家、集落、町、都市、故郷、国家というレベルも一つの個人空間のユニットとして考えるものなのである。

3. 時間軸からみた空間認識

「場所」を「場所」たらしめている個別の物体や建築物は、今現在生きている空間を、「場所」として現実化し、また、永続化していくための記憶装置にすぎず、特定の空間が個人にとって安らぎを与えてくれる「場所」となるために、かつて自分が空間を知覚した時の記憶を呼び起こす「場所の記憶」として扱われている。建築物や周囲の物体の集合は、彼にとっては環境要因ではなく、人間の知覚体験の対象の一つでしかありえないのである。狭い意味で考

えるならば、ここで定義する空間の認識は、自分の身体を使って達成することのできる範囲としてとらえ、環境という広がりに対しては、空間の認知は場所の拘束からどのくらい自由になっているか、また、自分の空間の一コマの連続がどのくらいの広がりをもち、どのくらいの速度をもっているのかということになる。たとえば「魔法の絨毯」のように、自由に「場所」から「場所」へ移動するような感覚であろうか(図3)。

トゥアンにとって、「今」を生きている空間がすべての価値をもち、歴史や社会の変化や個人の生活変化といった過去は、時間としてとらえず、「今」を知るための「運動」と「流れ」として時間を把握している。たとえば、自分の

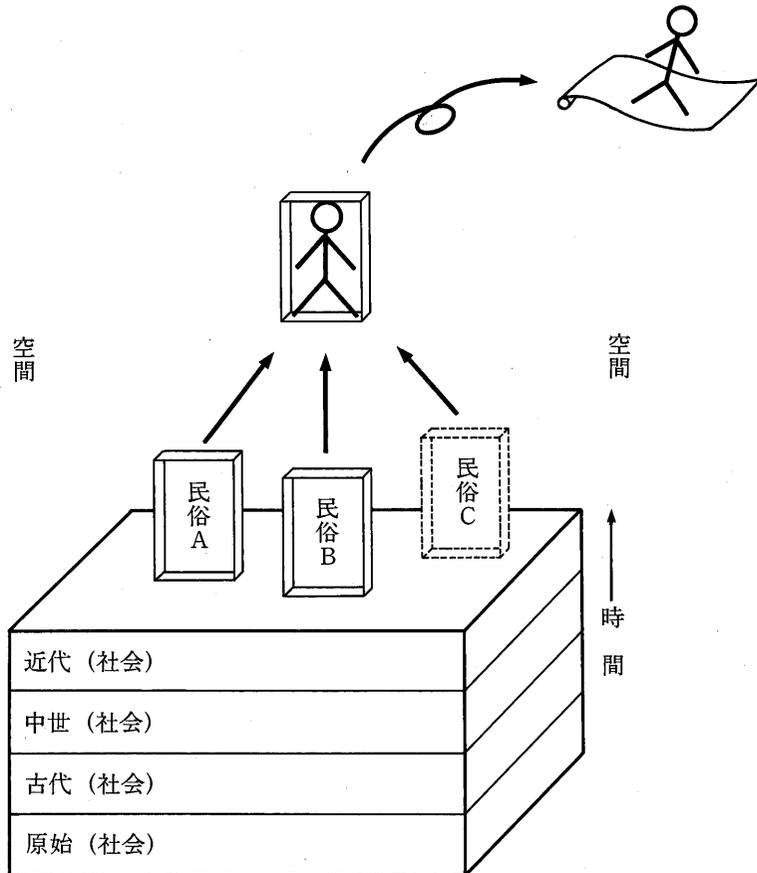


図3 時間軸からみた空間認識

町から隣町まで行く時間は、空間の移動ではなく、空間の知覚経験によって構成された運動の歴史が込められているだけのものとして考えるのである。

場所が人間にとって特別な「場所」となるのは、このような「時間」を背景にもっている。トゥアンの理論では、「場所」は「時間」の流れの休止点としてとらえ、空間のなかに時間が存在していることになる。そして場所への愛着ができるためには、時間が必要であるが、持続よりも経験の強さが重要な意味をもっている。トゥアンは、「今」という現在のなかで生きることを切望し、過去と未来は経験の流れをつなぎとめているものと考えている。トゥアンの価値体系が自由な空間を求めながら、安全で囲われた個人空間の場にこだわる背景には、我々が属する国家や民族、市民、社会、家族といった環境はすっぱり取り外され、個人空間の枠組みを強調する自己中心的な認識論が浮かび上がって来る。

人間は誰でも同じように空間を認知しているのではない。個人によって、集団によって、民族によって空間の認知の仕方は異なっている。こうした差異性を十分に配慮して空間と環境を理解すべきであるが、彼はまったく除外してしまい、一律に経験の特質のみ注目している。そして、個人空間のユニットを浮遊している限りにおいては、他者の個人空間の動向については、何も記されていない。ただ、環境のなかに現れる個人空間と場所を偏愛するのである。

Ⅲ 「経験」概念の多義性

前項まで、自分の言葉で分かりやすく、本稿が対象としたイーファー・トゥアンの著作『空間の経験』の論述構成の骨子、つまり論述の「構造」を図解をまじえ、いかに独自の「空間思考」であったかを明らかにした。この「空間思考」の根底を成すものは「経験」という概念である。

あらためて考えてみれば、原題が *Space and Place* であるにもかかわらず、『空間の経験』

という翻訳の題名に如実に示されているように、「経験」という概念が独自に追及されてこそ成立した「空間思考」である。翻訳者山本浩はこの邦訳の“改題”について何も言及していないが、副題は *The Perspective of Experience* であり、直訳すれば「空間と場所—経験のパースペクティブ」になる。ちなみに、邦訳の副題は「身体から都市へ」となっており、本書の主張を一般読者のために意識する形式をとっている。

「経験」はトゥアンの論理構成にとって、キーワードであると同時に、これが何より重要なことであるが、きわめて多義性であることである。トゥアンが、古今東西の文学や、はては演劇や映画の登場人物の会話まで数多く引用して例証しようとしていることは、様々な状況における人物の「経験」を、いかに自己の「空間思考」に結びつけるかということである。この場合「経験」は広義に解釈して、「認識」と同義にさえなる。

以下、この「経験」（つまり人間の認識過程）について、論述に添って解明を試みる。多様で重層的な意味でこの用語が用いられているため、より明確に追跡できるように、①から⑩の番号を付して列挙する（引用の冒頭の主語としての「経験」は、煩雑さをさけるため適宜省略する）。

トゥアンが「経験」の概念を、真正面から取り上げた章は、2章「経験のパースペクティブ」（21頁～39頁）〈p 8～p 18〉である。これは今書いたように原書の副題ともなっており、骨格を形成する章でもある。章のタイトル名である「経験のパースペクティブ」とは、やや文学的な表現であって、本章の内容から考えれば、「経験の見方・とらえ方・見通し」つまり「経験とは何か」ということに尽きる概念規定でもある。

①「受動性という合意をもって」いる（22頁）〈p 9〉。要するに「経験」は「受け身」である。

②「自分がこうむってきたことから学ぶ能力」（22頁）〈p 9〉。「経験」は「学ぶこと」でもあ

る。

③「経験によって構成された、つまり感情と思考によって作りだされた現実の世界」(23頁)〈p 9〉。「経験」は現実の世界である。

④「危機を克服することである」(23頁)〈p 9〉。「経験」に能動的な要素があるとすれば、危機を克服するために、未知なる状況へ挑戦することである。

⑤「感情と思考とが複合したもの」(24頁)〈p 10〉。「経験」は認識の手段であり、主観的なもの(感情)と客観的なもの(思考)との両面からなされる。

⑥「人間の五つの感覚は常に相互に強め合いながら、複雑に秩序づけられ…我々ははその世界のなかで生きていく」(27頁)〈p 11〉。つまり「五感」で空間を認識する。

⑦「運動感覚と視覚と触覚(は)…空間の認識」(28頁)〈p 12〉。空間は五感と運動で認識する。

⑧「移動することによって、方向の感覚を獲得する」(28頁)〈p 12〉。空間は運動で認識する。

⑨「(空間には)自己を中心にした大まかな座標軸が想定される」(28頁)〈p 12〉。「経験」によって立体知覚能力、つまり空間認識力を身につける。

⑩「人間の空間を構成し組み立てていくものは、もっぱら視覚」(35頁)〈p 16〉。空間は視覚によってもっとも強く認識され、空間認識には、一見無縁とも思われる五感の他の感覚(聴覚・触覚・臭覚・味覚)も、じゅうぶん補助的手段に作用している。

⑪「人間の空間は、人間の感覚と知性の質を反映」(35頁)〈p 16〉。個々人の人間の「経験」と想像力の違いにより、空間認識には(個人差)が生ずる。

⑫「物体や場所を全体的に経験するとき、その物体や場所は具体的な現実性を獲得する」(39頁)〈p 18〉。五感全体で「経験」してはじめて、「物体や場所」は現実になる。

また、あわせて、トゥアンの「空間論考」と

して関連する他の著作である『トポフィリアー人間と環境』(小野有五・安部一訳 せりか書房 1992年 原書は1974年)と『個人空間の誕生』(安部一訳 せりか書房 1993年 原書は1982年)の2書もあわせて検証した。というのは、『空間の経験』は原書が1977年に公開されており、あたかも前後を挟んで、「空間3部作」という結果になっているからである。

まず、前者では、「経験」すなわち「認識」の直接的な概念規定はほとんどなく、以下の2か所が『空間の経験』と直接関連するところである。

⑬「過去の認識は、場所への愛の重要な要素」(171頁 第8章 トポフィリアと環境—親しさと愛着)。

⑭「隣近所」は、近所つきあいとは本質的に関係のない心の中の構成概念であるように思われるのだ。その認識と受容は、外部世界に関する知識しだいで異なる」(343頁 第13章 アメリカの都市—都市の隣近所)。

後者では、同様に、

⑮「近代以前の感覚世界は小さく複雑であり、眺めと匂いと音が争いぶつかりあった。近代の知覚的な経験は、視覚的な刺激や経験がほかを圧倒するとともに、互いに分離され明瞭になる傾向がある。この変化の結果、知覚世界は拡大しているが、一方でその原初的な豊かさが失われているのだ。もう一つの結果は、自己についての感覚が環境から切り離され、強化されていることである。見ることの強調、とりわけ心の目で見ることの強調は、個人を孤立させる効果と、認識の唯一の枠組みとしての自己に関する意識を促進する効果があったのだ」(162頁 第6章 環境と視覚)。

⑯「触覚は五感の中で最も基本的な感覚であ…接触は現実性の空極的な確認方法である」(165頁 第6章 環境と視覚)。

同じような定義が連続しあるいは重複するので、整理を試みれば以下ようになる。

著者イーファー・トゥアンにとって「経験」すなわち「認識」の意味合いは、第一に、五感と

結び付いた、かなり原初的な特質をもっている。またそれだけに、主体的で能動的な要素に欠けるともいえよう。列挙すれば、①②③④⑦⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑯がそうである。とくに、「触覚」に力点をおいた「経験」の意味づけは、著者の一大特色である。しかしながら、第二には、これと相反するかのように、「知覚」と密接な関係にある「視覚」認識や客観的な思考の重要性をも説く。列挙すれば、④⑨⑩⑪⑯がそうである。さらに第三には、これらの二つが複合することも「経験」の重要な側面であるという。列挙すれば、⑤⑪⑯がこれに相当する。こうした重層的な見方が、「経験」の多義性を形成する。そのうえ第四には、五感に「愛あるいは愛着」という一面を加え、あたかも「六感」とでも主張するかのような⑬の場合や、あるいは⑭のように受動的な認識（本質に関わらない素直な心の動き）と能動的な働きかけを可能にする「経験」の蓄積（知識）とのあいだで揺れ動く心理状態までも、「経験」の視野に含んでいるから、一筋縄では解釈できない。

こうした認識論を押し進めると、「空間」はどうなるのだろうか。

「空間」は、そもそも「神話的空間、実際の空間、抽象的もしくは理論的空間」（36頁）〈p 17〉の三種類に分類される。したがって、個人レベルの「経験」フィルターを通さない「計画都市」を伴うような「都市」は、「抽象もしくは理論的空間」のカテゴリーに分類されてしまう。このように「空間」を「経験」という側面から限りなく追及していけば、「実際空間」すらも存在し得なくなる。

これに対して「経験」に密着して存在するのが「場所」である。そして、この「場所」に関する彼の極論を紹介すれば、「場所は、ある種の物体である」（37頁）〈p 17〉。つまり、「場所」は「空間」ではなくなるのである。著者がいみじくも例を示しているように「肘掛け椅子も一つの場所」（265頁）〈p 149〉となり、この理論を推し進めれば、「場所」と「物体」との区別も必ずしも必要ない。さらにいえば、「物体と

場所は価値が集中」（38頁）〈p 18〉しているから、換言すれば、「場所」は、価値認識（人間にとって価値があると思われること）により、はじめて存在するから、日常使うことによって次第に親密さが増すような、家具調度や工芸品と同等な存在になる。10章の「場所の親密な経験」（239頁～264頁）〈p 136～p 148〉は、結論からいえば、「場所」についての「工芸論」であり、使う人間に重点を注いで考察した箇所は「文学論」にすらなっている。

この「経験」と空間理論（もうすでに空間ではなくなっているが）の結論は、次の引用がわかりやすいだろう。一言でいえば、「家」一般もそもそも有り得ないのである。

「自分の家は、親密な場所である。我々は、その建物を自分の家であり場所であるとする（引用者注：本当の「経験」に基づく認識ではなく、通りいっぺんの概念的な認識）が、しかし、過去の魅せられたイメージは、視覚によって見ることのできるだけの存在である建物全体から喚起されるよりも、むしろ屋根裏部屋と地下室、暖炉と出窓、人目につかない部屋の隅、腰掛け、華美な鏡、割れた卵の殻といった手でふれることもでき、匂いを嗅ぐこともできる建物の構成要素や、家具調度品によって喚起される」（256頁）〈p 144〉。こうであるがゆえに、当然ながら「都市」もない空間理論にいたるのである。

Ⅳ 現代の我々にとっての「場所」理論の意味

1. 「場所」理論の有効性

以上のように、イーファー・トゥアンの「場所」理論の概要を見てきたが、ここであらためてトゥアンの理論が、現代の我々の空間認識に及ぼす影響について考えてみることにする。というのは、現代の我々が生活する環境は多様化しており、我々は個人レベルにおいては「空間」と「場所」については、あいまいなまま見過ごしている傾向があるように思うからである。

①まず第一に、都市や建築が生活している人間の身体と直結しているものであるという根源的な問いかけであるトゥアンの「場所」理論は、人間の本来の愛着や、安全性といった身体レベルにたった問題を想起させる役割をもっている。

②日常生活のなかで我々は、五感を意識することはほとんど無いといってよいだろう。日常の生活とは、見慣れた風景であり、我々は目を開けたまま実は見ていないのではないかと、トゥアンは問題にする。視覚を中心とした感覚経験の有無が、空間認識の大きな要因であるに違いないことを、あらためて認識する。人間にとって、最初は見知らぬ空間が、意味に満たされた具体的な空間に変化していく過程の重要性をトゥアンはくりかえす。

このことはデザインにおいては、身体的ハンディキャップのある人々にとって、手助けになる環境づくりに応用できるだろう。なぜならば、知覚経験は人間に最初から備わっているものではなく、生まれてから大人へ成長していく過程において、ゆっくりと身体の運動能力の成長変化にともなって現れてくる感覚である。このことを考えれば、様々なハンディキャップを補足する機能をもった、住環境を生み出すことにつながる。とくに、視覚と、距離感を経験する多様性が「空間」認知の中心的機能である。また、視覚を失っている人々に触覚を経験することで、「空間」を認知できるように置き換えていくことは、現在すでに実施されている。つまり、知覚が正しく認知されていれば、異なった空間においても、自己を失わずに適応していけることを、トゥアンは強調しているのである。

③「場所」はより快適な居住環境を作り出すために、価値が集中している中心である。「空間」とは、様々な概念の集合を表示する抽象的な言葉で、必ずしも実態があるものではないと、トゥアンはいう。このことを我々は日常生活のなかで、明確に認識していないことをトゥアンは指摘している。

彼の安全性を重視する「場所」理論から考えてみるならば、「場所」はある種の「休止」を意味する。幼い子供にとっては、親がまず第一番目の「場所」であり、世話をしてくれる大人は、栄養と保護の源であり、安定した避難場所となる。このことを拡大解釈すれば、大人にとっては、家、集落、都市、町、故郷、母国が休止の対象となり、安全と保護を見出す「場所」となるのである。しかし、この当然と思われる安全な「場所」というものは、大きな「空間」すなわち環境のなかに、いくつも点在するように配置されていることを、我々は意識していないのである。

そもそも、我々にとっては、「空間」と「場所」については、きわめてあいまいな解釈しかせず、厳密には区別していない。我々は、外部空間（自然）と内部空間（室内）が常に、連続しているという、いわば「空間の透明性」を好む傾向にあり、あらためて知覚経験や、感情や意味によって「場所」を喚起する必要性を感じることは少ないのではないだろうか。その意味からも、トゥアンのいう「空間」から、囲い込まれた安全な「場所」については、物理的側面からのみとらえ、「空間の隔離」（たとえば間仕切りなど）といったイメージが、先行しがちである。

④トゥアンの「場所」理論は、執拗なまでに人間を主体とした経験と感受性に焦点をおいて、我々の環境をとらえようとしている。彼のいうところは、せじつめれば、結局「今」を大切にすることを意味している。つまり、我々の認識している時間概念とはまったく異なり、過去や未来という時間的枠組みを取り去った、ただ「今」のなかに個人の生活すべてがある。したがって、日常の「空間」認識すらも時間的枠組みを超えた経験の有無によってのみ、なされるというのである。

このことは、「今」を生きることが、「場所」に価値をもたせる結果をもたせる。しかし、我々は、「今」に立ち、「未来」へ向けて「空間」を建設する（たとえば都市計画など）こと

は、ごくあたりまえの概念であるが、トゥアンほどには「今」という考え方に重きをおかないでいる。

⑤トゥアンの知覚経験を根拠に、文様やデザインを見るならば、伝統として認識している色柄や形態は、個人レベルで見れば伝統であっても、他の文化や民族のなかでは伝統ではありえないことになるのだろうか。つまり、トゥアンは個人「空間」は、どの環境に組み込まれても安全な「場所」として存続しつづけるといい、これに従えば、ある個人が持ちつづけている伝統は、個人の「空間」と同様に、世界共通の伝統になりえない。

2. 「場所」理論の問題点

しかし、トゥアンの理論は、他者とのかかわりといった社会性や文化の差異性、性別、身体の状態等がまったく無視され、また、人間の「主観」に重点がおかれてしまい、個人的「空間」から環境へのつながりは明確ではない。いくつか例をあげると次のようになる。

①人間を主体とした知覚経験を強調しているが、「場所」を「場所」たらしめている個別の歴史性や、社会的出来事がまったく無視されており、過去の経験は現在の「場所」認知の記憶装置として扱われるのみである。連続的な経験の積み重ねによって、「空間」が秩序化されるとしていながら、断片的な「今」という空間を認識することに重点をおきすぎている。環境の変化や社会の変化から何も影響を受けない恒常的な安全な個人の「場所」がはたして存在しうるのであろうか。

すべての出来事をも「今」という現在を知るための、時間的運動にすぎないとするトゥアンの広大な解釈は、人間が主体となって環境を整美していくという積極的な、未来に向けての地平は感じられないのである。

②あまりに「今」という場所にこだわる理論は、ある特定の領域に対する偏愛にすぎないのではないだろうか。人間を主体にした知覚経験による空間認識のすべてが環境を知る手段ではないはずである。自然がもたらす変化や、未来

の時間という観念は、空間の諸価値を変化させていくはずである。

トゥアンの論ずる経験と意味によって想像される空間は、次第に狭められ、屋内化し、室内化していく個人の創造のなかに存在するにすぎないのではないだろうか。

③文化や自然環境の違いや、身体の状態の差異性（たとえば性差）によっても現れる「空間」の特性が異なるはずである。いつでもどこでも展開可能な個人「空間」は、それぞれに愛着の対象である。この個人経験だけに主観をおき、客観的な空間である環境へのかかわりを拒否する彼の理論で考えるならば、個人空間にとどまる人間の存在はひどく孤立したものになってしまうのではないだろうか。他者とのかかわりは、環境という枠組みのなかでも同時に綿密に考えねばならないはずである。

④とくに、スペースデザインの分野においては、個人的指向性と環境との均衡のとれた相互に響き合う新しい「場所」の創造が必要となる。トゥアンのいうように「空間」を個人の身体という面からのみとらえることも可能であるが、空間を集団でとらえることも可能なはずである。

広い意味での生活環境というレベルで考えるならば、たとえばコミュニティ（地域）というものは、限られた個人の知覚経験だけで統括されているわけではなく、様々な経験の集合体によって一つの環境が生み出されているはずである。常に異なる個人「空間」のなかでの経験は、地理的な距離があるにせよ、人類としての何らかの同一性があるからである。

トゥアンは具体的な「場所」を様々にとりあげながら、空間の自由性を求め続ける。人間をたった一つの点としての存在でとらえ、自由な「空間」に、そのたった一つの点、すなわち浮遊し、やがては世界の中心となる。しかし、そういった「空間」自体がもつ規制力についてはまったく語られていない。

トゥアンがどう理論を展開しようとも、人間を規制しているものは物理的な環境である。ト

トゥアンのように身体というものや、身体の知覚経験の固有性を絶対視することは不可能である。トゥアンの「場所」理論の中心的な目的は何であろうか。

まとめると以下のように考えることができるのではないだろうか。

つまり、ハイスピードで変化していく社会が、人間中心の「場所」を変化させてしまい、もはや長い年月の安定した環境は望めなくなってしまった。このことをトゥアンは、部屋や家、街、集落、都市、国家といったあらゆる例をたどりながら警告しているのである。人間の身体は、「空間」の一部であり、身体の知覚経験の形成は一生かけて行われるものである。その持続性は、現代では通用しなくなっていることも警告している。

トゥアンのいう「場所」と安全性との結びつき（「場所」が人間の逃避の対象であること）は、「場所」理論に多義性を含めることによって、現代環境論に主観主義的な主張であることをじゅうぶん承知しつつも、一点の突破口を見出そうとしたものではないだろうか。

参考・引用文献

- 1) Yi-Fu Tuan, *Space and Place: The Perspective of Experience* (Minneapolis University of Minnesota Press, 1977)
- 2) イーファー・トゥアン 山本浩訳『空間の経験—身体から都市へ—』(筑摩書房 1988年)
- 3) イーファー・トゥアン 小野有五・阿部一訳『トポフィリアー人間と環境—』(せりか書房 1992年)
- 4) イーファー・トゥアン 阿部一訳『個人空間の誕生—食卓・家屋・劇場・世界—』(せりか書房 1993年)
- 5) イーファー・トゥアン 片岡しのぶ・金利光訳『愛と支配の博物誌』(工作社 1988年)
- 6) イーファー・トゥアン 金利光訳『恐怖の博物誌』(工作舎 1991年)
- 7) 環境デザイン研究会編『環境デザイナー—体験・風土から建築・都市へ—』(学芸出版社 1998年)
- 8) 沢田知子『インテリアデザインへの招待—暮らしの文化に学ぶ—』(彰国社 1992年)
- 9) オットー・F・ボルノウ 池川・大塚・中村訳『人間と空間』(せりか書房 1978年)